

トロント美術界に旋風を巻き起こした

十一人の官能的抽象画家たち

トロントが長い眠りから目覚めたのは一九五三年、「ペインターズ・イレブン」(十一人の画家)がまとまった一派として、初めての展覧会を開いた時からのことである。ペインターズ・イレブンは、ぬくぬくとした居心地のよい居間の中にあつて冷たい不穏な嵐のような存在だった。

当時、トロントの美術界はいわば倦怠感の中にとっぷりとつかっていた。その中でモントリオールとはきわめて対照的だった。モントリオールでは「モントリオール派」の誕生以来、やゆ、嘲笑や自己主張の叫びが周囲を圧していた。既制芸術への反感を内部にうっ積させたトロントの若き孤高の急進画家たち——かれらはモントリオールを羨み、画廊を画家個人の好むままに戦慄の間や歓喜の場所に変わるモントリオール美術界の「イズム」(主義)を羨んだ。

ペインターズ・イレブンが誕生したきっかけは、一九五三年のある晩、トロント繁華街のデパートである集まりであつた。このデパートでは、室内装飾の一つとして多くの地方画家の描いた抽象画、非具象画を飾り、PRのために写真をとらせたのである。この時集まった画家の

一人が全員で展覧会を開こうと提案した。具体的な手筈を検討する会合が、オシャワ(トロント近郊)近くの湖畔にあるアレクサンダー・ルークのアトリエで持たれた。たまたまその中の一人が、この会合に運命的なものを感じ、彼らがいま分水嶺を越えようとしていることに気付いて、この騒々しい談論風発の、ときにまとまりを欠いた議論を、テープに録音している。

内部のリーダーはオスカー・ケイヒン。



ハロルド・タウン作「二ネベの四つ角」 The National Gallery of Canada, Ottawa

彼は三年後に自動車事故で悲劇的な死を遂げている。会合に出席した中で、年長の画家達をあげると、ハミルトン在住の永遠の実験家ホーテンス・M・ゴードン、商業美術家として長年働いたのち前年に

急進画家として再出発したジャック・ブッシュ、オンタリオ美術大学の教師で、その革命性ゆえに時々同僚を悩ましていたジョック・マクドナルド。若手ではトム・ホジソン、ハロルド・タウン、カズオ・ナカムラ、レイ・ミード、ウイリア



グループ・オブ・イレブンの仲間たち。

ム・ロナルド、ウォルター・ヤードがメンバーである。全員が、当時行なわれていた万人向けの全国絵画展や地方絵画展に出品していたが、今回初めて、上品に落着いた保守的な都市トロントで、徹頭徹尾抽象的、非具象的な展覧会の自主開催を敢行したのだった。

ペインターズ・イレブンの第一回展覧会は、一九五四年二月に、トロントのロバーツ画廊で開催された。二週間の開催期間中、同展を訪れた観客の数は、この画廊始まって以来の記録的なものだった。若い地方画家達は興奮したが、既成の画家は嘲笑した。売れた絵はほとんどなく、批評家は全く無関心か、せいぜい軽い関心を示したにすぎなかった。それから二年の間にグループの絵画展はオンタリオ

州各地で開かれたが、これは主として熱烈な支持者の支援によるものであった。ところが一九五六年四月に、ペインターズ・イレブンは、毎年行なわれるアメリカ抽象画家展の招待出品者としてニューヨークへ招かれることになった。アメリカの批評家は彼らの作品を絶讃し、ニューヨークの商業画廊で個展を開くに至った者も何人か出た。ウイリアム・ロナルドなどは、その結果ニューヨークへ永住してしまった。

アメリカの新聞に現われた讃辞を耳にするにつれ、カナダ人もついに彼らの業績に強く印象づけられたのだった。ちょうどモントリオール派がパリっ子達の関心をひきつけたのと同じように、トロントの革命画家はニューヨークと深い関係をもつに至った。この二つのグループは、向いている方向は違っても、共通の闘いをやっていることをよく承知しており、



ウィリアム・ロナルド作「綠色火花」 The National Gallery of Canada, Ottawa